

委託事業実施内容報告書

平成22年度「生活者としての外国人」のための日本語教育事業

【ボランティアを対象とした実践的研修】

受託団体名 財団法人 箕面市国際交流協会

1 事業の趣旨・目的

地域住民、大学生、行政関係者等、幅広い参加を得つつ相互研修機能を高めながら、外国人少数点在地域における「なにも失くさない(=相手の母文化や母語に対する自尊心を損ねない)日本語教育」に必要な視点、およびそれを支える社会に必要なものとともに考える。

外国人当事者の声を中心にしつつも、行政や教育現場など幅広い分野から参加を得た企画会議という相互研修の場において、課題意識や視点についてさらなる意識化をはかる。

外国人当事者が公的な場にて、自分の思いや経験を語ることによって、個々の表現力を向上させ、地域で国際化を促進する人材の質的充実を支援することを目的とする。

2 企画委員会の開催について

【概要】

開催日時	開催場所	出席者	議題	会議の概要
6月12日	豊中市立千里公民館「コラボ」	崔聖子、鮫島メーリ、金星令、呉寿恵、森栗茂一、大谷晋也、浜田麗子、諏訪忠泰、吉田功、小西敏弘、岡村公子、岩城あすか、張茜、劉正宜、松原光平	①今年度事業説明 ②自己紹介、前年度の振り返り ③7月の「在住外国人との語り合いカフェ」の企画 ④模擬授業(金)	議事録参照
8月28日	豊中市立千里公民館「コラボ」	崔聖子、鮫島メーリ、福井優紅、ネルソン百合子、呉寿恵、大谷晋也、浜田麗子、諏訪忠泰、吉田功、小西敏弘、岡村公子、井上勉、張茜、劉正宜、松原光平	①「在住外国人との語り合いカフェ」の報告 ②今後について	議事録参照

10月2日	豊中市立千里公民館「コラボ」	崔聖子、鮫島メーリ、福井優紅、ネルソン百合子、金星令、森栗茂一、浜田麻里、大谷晋也、細貝瑞季、松本登、浜田麗子、諏訪忠泰、小西敏弘、岡村公子、ロー・マサリエース 岩城あすか、張茜、劉正宜、松原光平	①箕面市立第六中学校出講について ②10月「在住外国人との語り合いカフェ」の企画 ③市役所職員研修の予定 ④模擬事業(浜田、松本)	議事録参照
11月6日	豊中市立千里公民館「コラボ」	崔聖子、鮫島メーリ、福井優紅、金星令、吳寿恵、浜田麻里、細貝瑞季、松本登、浜田麗子、諏訪忠泰、小西敏弘、岡村公子、ロー・マサリエース 岩城あすか、張茜、劉正宜、松原光平	①10月「在住外国人との語り合いカフェ」の報告 ②模擬事業(細貝、ローニー) ③シンポジウムの企画	議事録参照
1月29日	豊中市立千里公民館「コラボ」	崔聖子、鮫島メーリ、福井優紅、金星令、吳寿恵、森栗茂一、浜田麻里、大谷晋也、細貝瑞季、浜田麗子、諏訪忠泰、吉田功、小西敏弘、岡村公子、岩城あすか、張茜、劉正宜、松原光平	①金時鐘さん講演の報告 ②市役所職員研修の報告 ③今年度事業の振り返り	議事録参照
2月5日	箕面市国際交流協会	崔聖子、福井優紅、ネルソン百合子、浜田麗子、岩城あすか、張茜	来年度の事業について	議事録参照

【写真】



→企画会議の風景(6月12日)



→企画会議の風景(11月6日)

3 研修講座の内容について

(1) 研修講座名

「わたしは日本で生きています(Part2)」

－ 少数点在地域での「なにも失くさない日本語教育」を考える－

(2) 研修の目標

- ① 日本語能力を有する外国人が当事者として地域への発信することにより、更なる相互理解とエンパワーメントを促進。
- ② 当事者たち自らの発信により、外国人少数点在地域における「何も失くさない日本語教育」に必要な視点、およびそれを支える社会に必要なものをともに考える。

(3) 受講者の総数 482人(延べ人数ではなく、受講した人数を記載すること。)

(4) 開催時間数(回数) 31時間 (13回)

(5) 参加対象者の要件

特になし。

(6) 受講者の募集方法

- ・広報チラシの作成
- ・当協会の情報誌「めろん」、ホームページに情報掲載
- ・市広報「もみじだより」などに情報掲載
- ・近隣大学、国際交流団体のネットワークやメーリングリストに情報提供

(7) 研修会場

大阪大学豊中キャンパス(豊中市)、箕面市役所(箕面市)、
豊中市立千里公民館(豊中市)、箕面市第六中学校(箕面市)

(8) 使用した教材・リソース

各講師による独自教材。

(9) 講座内容

日時	講座名／学習内容	講師	受講者数
7月1日 19:00～21:00	在住外国人との語り 合いカフェ ワークショップ「読めな いお知らせ」	本事業企画委員 崔聖子、福井優紅、森栗茂 一、浜田麻里、細貝瑞季、浜 田麗子、諏訪忠泰	24名
7月15日 19:00～21:00	在住外国人との語り 合いカフェ ワークショップ「私の学 び」	本事業企画委員 崔聖子、鮫島メーリ、金星令、 森栗茂一、細貝瑞季、諏訪忠 泰	38名
10月15日 19:00～21:00	在住外国人との語りあ いカフェ(哲学カフェ) テーマ:母語とは何か		39名
11月5日 19:00～21:00	在住外国人との語りあ いカフェ(哲学カフェ) テーマ:多様性は豊か さをもたらすか		41名
11月18日 13:00～15:30	講演 「私の見たアメリカ」	本事業企画委員 鮫島メーリ	35名
11月18日 13:00～15:30	講演 「異文化へのまなざし ～二つの国の体験を 通して～」	本事業企画委員 福井優紅	35名
11月18日 13:00～15:30	ワークショップ 「スリランカ料理の食 べ方」	本事業企画委員 ネルソン百合子	35名
11月18日 13:00～15:30	講演 「韓国を知ろう」	本事業企画委員 呉寿恵	35名
11月18日 13:00～15:30	講演 「私は日本で生きてい ます」	本事業企画委員 浜田麗子	35名
11月18日 13:00～15:30	講演 「グアテマラについて」	本事業企画委員 ロニー・マサリエゴス	35名
1月22日 13:30～16:30	講演 「私の日本語の由来」	詩人 金時鐘	77名

1月22日 17:00～20:00	講演 「韓国併合100周年の 振り返り」	詩人 金時鐘	9名
1月27日 13:30～15:30	ワークショップ 「読めないお知らせ」 -市役所編	本事業企画委員 崔聖子、鮫島メーリ、福井優 紅、諏訪忠泰 外国人市民 パクチラ・サタポーン、西尾アイ リーン、洪美羅	44名

(10) 講座の評価

① 受講生の感想

日時:7月1日、7月15日	在住外国人との語り合いカフェ	場所:大阪大学オレンジショップ
<p>7月1日</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 少人数でも定期的にやったら良いと思う。 ・ ワークショップがよく考えられていた。印鑑登録、学校のお知らせなど日本社会にいたら不思議に思わないところが盲点だと感じた。 <p>7月15日</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 様々な経緯で来られている方々のお話や、難しいトピックを含め、どのような思いを持たれているのか、良く聞くことができました。私自身、在日外国人という立場ながら、微妙な位置にいる身であり、勉強になりました。 ・ 外国人受入について、ネガティブな雰囲気と話題から入らねばならないというような固定的な意識がありましたが、和やかな雰囲気の中で話し合っゆくことの重要性を感じました。 ・ 語り合う場所を作ることに感謝しています。 		

日時:10月15日、11月5日	在住外国人との語り合いカフェ	場所:大阪大学オレンジショップ
<p>10月15日</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ もう少し時間を区切ってテーブルごとのワークがあったら、つながりが生まれ面白くなったかもしないと思います。 ・ 普段だったら出会うことのない意見や、自分で考えるだけでは足りない「生」の声に出会うことができたのがとても楽しかったです。 ・ 大学の学問と社会の課題との乖離を感じた。 <p>11月5日</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 宗教・文化・医療・民族など、多くの分野について改めて考える機会を持てた。 ・ 話題の方向づけがもう少しあっても良いのではと思う。 		

日時: 11月18日	講師: 呉寿恵、鮫島メーリ、 ネルソン百合子、浜田麗子、 福井優紅、ロニー・マサリエゴス	場所: 箕面市立第六中学校
------------	--	---------------

生徒たちの感想文からの抜粋

- ・ 中国はとなりの国なのに、詳しいことはあまり知りませんでした。なので、新しい発見が多かったです。中国と日本は似てそうで似てないという所が多かったです。違いが面白かったです。これからも調べていきたいです。
- ・ パソコンや本で調べただけでは、グアテマラもことを知識だけでしかわからなかったけど、実際にお話を聞くことによって、すごく分かりやすかったです。
- ・ ぼくが一番心に残っているのは歴史です。日本が植民地にしたせいで、帰れなくなり、更に、無理やり日本人にされたせいで、故郷に行くことができなくなってしまったのは知りませんでした。韓国は先日まで、日本の一部のようなものだったのだと、小学校で学ばないことを学ぶことができました。

担任の先生方から

- ・ 生徒達は、事前学習として、本やインターネットで各自テーマを決め調べてきました。ただ実際にその国の人に話を聞くことでより深く学べ、調べたことと少し話が違ったりする中で、1つの情報だけではなく、話を聞くことの大切さなど再確認することができました。
- ・ 生徒達にとって一番大きかったのは、自分達の当たり前が世界の当たり前とは違うということを感じる機会であったことだと思いました。国や地域が変わればまた違う考え方、習慣があるという事を知ることができたのは、これからの考え方に大きく変化があるのではないかと思います。
- ・ 歴史の中には、まだ自分たちの知らない、しかし重要な課題が残されていることに気づく、意義深い時間でもありました。
- ・ 話を直接聞いたり、体験することによって、違う文化を受け入れる心が芽生えるのではないと感じられました。

日時: 1月22日	講師: 金時鐘	場所: 豊中市立千里公民館「コラボ」
-----------	---------	--------------------

- ・ 日本語教育では触れられない問題に出会えて良かったと思います。「50音以外の音は日本人には不快な音に聞こえる」というのがとても印象的でした。私の周りにも「F」の音が出せない韓国人をバカにしている日本人がいたのを思い出し、何だか恥ずかしくなりました。
- ・ 歴史的なこと、文化的なことを体験に基づいて聞くことできた。実際に体験されてきたことの話聞くことは、重みも感じ実感させられました。

- ・ 自分の父と同じ年でもあり、戦時中、在日の人たちの言葉を日本がどのように奪ったかよくわかった。「私の日本語の由来」「何もなくさない日本語教育」という題の暗喩性がやっとわかった。
- ・ 自分自身を形づくっている内なるものの表現・表出が他から与えられた表現・言語でしか成りえない。「自分は何者か」「私」の問題意識に通じる講演でした。苦しみと向き合い続ける姿勢が大切だと思いました。
- ・ 植民地にするということが、政治的・経済的あるいは物理的に変化を強いるだけではなく、それ以上に文化(生活そのもの)を侵略したということに強く共感しました。「他者とかかわることで自分は豊かになる」という言葉が印象的でした。
- ・ 今の時代のニーズに合った深い内容が聞けましたが、テーマのしぼり込みが甘かった。
- ・ テーマに沿った内容があまり語られなかったような気がします。対談をもう少し深いものにして欲しかった。

日時:1月27日	箕面市役所職員研修	場所:箕面市役所
<ul style="list-style-type: none"> ・ 自分自身も相手(外国人)への対応について、より積極的になりたいと感じた。 ・ 外国に自分が行く機会が少なく、住んだ時の想像すらしたことがなかったので、多言語の通知を解読する研修は良い経験になりました。 ・ 窓口対応では、訳された冊子を渡したり、書類作成をこなすことで終わってしまいがちであるが、国際交流協会を紹介したり、相手の立場に立った対応が必要だと痛感しました。 ・ 話ができることより対応しようとするのが大切だということがわかりました。お知らせなどは、シンプル・ビジュアルで伝えることなど、字だけで伝えきれないことなど、日本で当たり前が外国の方には当たり前でないことがわかり、大変ためになりました。 		

② 実施主体からの研修内容結果評価

今年行政や教育委員会などの関係者も新たに企画運営委員として参加してもらった。本事業の企画委員相互研修の場である企画会議で課題意識や視点について更なる意識化を図ることができた。数回にわたる企画会議で外国人当事者は各自の経験や思いを語り合うことによって、個人の表現力を向上させただけでなく、行政や教育委員会の企画委員に課題提起をする役割も果たせた。特に、今年の企画委員は、当協会子ども事業のボランティアとその卒業者、医療関係の仕事に従事する当事者や学校で語学講師として活躍する当事者など、様々な立場からの意見交換ができた。

本事業の企画会議は、1、2年目では主に外国人当事者が安心できる環境の中で自らの思いを語り、互いを知り合うことでエンパワーメントを図ってきた。「外国人当事者の指導力養成」という目的はおおむね達成されたもの、企画内容については事務局案の提案どおりとなっていた課題

があった。しかし、3年目となる今年度は、信頼の土壌に立って自己開示ができた当事者の委員と地域の現状を把握できた行政関係及び有識者の委員はより主体的に、本質的な議論を展開することができた。幅広い見識を持つ多数の企画委員の参加を得ている本事業は、ようやく参加型の事業になりつつある。例えば、大阪大学と共同で行う「在住外国人との語り合いカフェ」や箕面市役所職員研修において、より多くの人に外国人や彼らを取り巻く日本社会の状況を理解してもらえるにはどのような工夫をすれば良いかなどについて、企画委員で話し合いながら決めていった。外国人当事者を中心に「何もなくさない(＝同化ではない)日本語教育」に必要な視点を出し合い、出張講座の内容を準備したことにより、企画委員からのアイデア等を生かすことができた。

2年間本事業の狙いを地道に発信したことにより、少しずつであるが、地域に変化が生じ始めている。これは、大阪大学における「外国人との語り合いカフェ」の定例化や行政関係者の企画会議への参加が実現されたことの成果と言えよう。今後も地域の国際化状況に即した企画内容を継続していく方法性を企画会議で共有した。

しかし、課題はまだたくさん残されている。現場の課題が行政政策に反映されるよう、行政関係の企画委員に情報提供や課題提起を行い、彼らからも「外国人当事者に直接話を聞き、様々な問題に気づき学んだ」との感想を得ているが、「声なき声」が集まり、何らかのシステムづくりに繋がるためには、まだまだ道端であろう。また、本事業に参加する外国人当事者以外に、地域に埋もれがちな外国人当事者がより参加しやすい「場」の醸成にもっと知恵を絞る必要があることを再認識した。

市の国際化施策に反映されるような協働の取り組みが展開されるためにも、3年間の積み重ねを踏み台として、更にこの企画を継続し、成果を発揮していかなければならない。

③ 実施主体からの外国人支援体制等今後の計画

2008年度(平成20年度)から3年間、当協会は在住外国人の思いを地域へ発信する場づくりとして本事業を展開して来た。2010年度(平成22年度)は、新たな試みとして、地域と大学を繋げることに挑戦し、計4回「在住外国人と語り合いカフェ」を開催した。参加者からは、「貴重な経験を聞かせてもらった」、「こういう機会が多くなるのが良い共生に繋がると感じている」との声もあれば、「難しすぎて、理解できない」、「頭の中が整理できないまま終わってしまった」などの感想もあった。日本人市民が異なる文化を持つ外国人市民の立場を理解しづらく思う反応も多かった。地域社会が外国人市民たちの日常生活や悩みを共有し、隣人として受入れるには、まだまだ任重くして道遠しだと感じられた。この事業を継続していく実施する必要性が改めて明らかとなったと言えよう。

一方、外国人当事者たちが安心して、自身の思いを発信できる場づくりをめざしてスタートした本事業は、同じ「外国人」という立場の当事者たちが互いに励ましあい、学びあう場に進化してきた。自分の居場所を求めて事業に参加した企画委員の一人は、「私はいつも日本語が100%理解できる振りをしていたけど、実はまだ分からないことが沢山あります。でも恥ずかしくて、聞けなかった。〇〇さん(他の企画委員)が何でも恥ずかしくがらず聞く姿にすごく感心しました。今後自分

も分からないことがあれば、聞くようにしようと思っています」。「私は地域に何十年も語り続けてきたが、社会全体は何も変わらなかった、諦めの気持ちもあったが、この事業に参加して、この仲間たちと一緒に、来年もぜひ頑張りたいと思っている。」などグループには大きな「求心力」が生まれつつある。

今後、当協会にはこれらのメンバーが自らの力で、地域社会に自分たちの存在を発信する活動や少数で点在している当事者間のネットワークづくりを推進することが求められる。今後は、グループの自律した運営を目指し、必要な事務的スキルの習得はもとより、地域情報や事業展開に関するノウハウを積極的に吸収してもらえよう支援したい。

(11) 事業の成果

① 他事業との連携

3年目となった本年は、企画委員による講演内容の幅も広がり、研修の質も向上してきた。また、市役所職員研修(行政)、近隣大学(若者層)への出講が定例化した。「テーブルを囲んで、(外国人)と直接話を聞いて良かった」、「外国人の気持ちが少し理解できて、言葉が通じなくても、気持ちが大切だと思った」などの参加者の声からは、他団体との連携により、「外国人」と「地域社会」との対話回路が少しずつ構築されつつあることが感じられた。

また、今年度は、より多様な場面で外国人市民の発信力を高めるために、企画委員に行政や教育と医療同行通訳を行う外国人当事者等、多様な現場から委員を募った。彼らの参加により、多角度から企画の検証を行い、より奥行きのある研修を実施できた。

② 研修後の人材活用

本事業に参加している外国人当事者の企画委員たちは、すでに地域で多言語生活相談員や、語学講師など活動している人材である。本事業を通して、表現力を高め、更にエンパワーされた彼らは、外国人の視点を活かした「国際理解」や「在住外国人の人権」に関する講座の講師として、市行政職員研修や、近隣大学など、活躍する場面を広げてきた。

今後は、本事業企画委員の当事者を中心に、日本語ができない外国人市民も含めた当事者同士のネットワークの形成に努める。グループが育成したあかつきには、地域の学校や行政、教育現場等に講師として、出向き、ホスト社会側社会との相互理解を進める役割を期待したい。

(12) 今後の課題

今後の課題としては、以下の4点があげられる。

1点目は、日本語でのコミュニケーションが難しい外国人にとって、参加しづらい企画が多かったという点である。本事業は、外国人市民が日本の生活で感じる日頃の思いを地域に発信することを趣旨としていたが、「日本語ができない外国人市民にももっと参加してもらいたい。」という課題は依然継続している。

2点目は、依然としてホスト側社会の中に、「『生活者としての外国人』の人権」というテーマが

理解されづらいことがある。外国人を隣人として受け入れる「多文化共生」の地域づくりのためには、ホストとなる市民一人一人の理解と意思が重要である。どうすればより多くの市民に関心を持ってもらえるか、あるいは「外国人」に対する偏見が社会課題であるということをいかに意識化できるかが課題である。

3点目は、2点目の課題を踏まえて、今年度はより幅広い市民の参加を求めて、ワークショップや「語り合いカフェ」等新しい手法を試みた。その際、ワークショップの進行や会議ファシリテーションにおいて、企画委員等スタッフのスキル不足により、発言する人が偏ったり、初めて参加する人がうまく発言できなかつたりする場面が見られた。より多くの人に働きかけるためには、前述のスキルやノウハウの習得や有識者による専門的指導が必要だと考えられる。

最後に、箕面市内に参加者が集まりやすい場所が少なく、近隣市にある公共施設を企画会議等の拠点にしていたという点が課題としてあげられる。企画委員からは「このような企画はもっと地域密着でやった方が市民に刺激を与えられて良い」との指摘があった。本事業を地域密着型で発信するために、拠点をどのように置くのか、あるいは市内の他団体とどのように連携するかは今後の検討課題である。

本事業は3年目となり、近隣大学との協働、市役所研修、中学校・高等学校への出講の定例化など、その試みが徐々に開花し始めた1年だった。今後は、上記の課題を踏まえつつ、外国人当事者がより主体的に働ける事業のあり方を模索する必要がある。そして、その活動の持続的継続に向け、寄り添い型の支援を行うことが今後の目標である。